

## メーワール派細密画『ギータ・ゴーヴィンダ』

### Folio 23 に見られる意匠

三澤博枝

#### 1. はじめに



図1 Folio 23 (Āhāḍ Museum Udaipur 2016年9月筆者撮影)

上の図1は Mewārī *Gītagovinda* (以下 Mewārī GG)<sup>1</sup> の Folio23 であり、*Gītagovinda* 1.23 (以下 GG) を絵画として表現したものである。先行研究者のヴァーツヤーヤンは、この Folio について「画家は詩のポイントをおさえており、雨雲のイメージとハリが小指で持ち上げるマンダラ山を構図としてまとめている」と述べ、「この絵画は、セット<sup>2</sup>の中でも素晴らしい作品の一つである」としている<sup>3</sup>。確かに、この Folio には山を支えるクリシュナが中心的に描かれており、一見するとインド細密画でよく目にする意匠に思える。

GG1.23 に登場するマンダラ山は、『マハーバーラタ』やプラナーナ聖典など、様々なインド神話で語られており、細密画においても数多く描かれている。しかしながら、それらの物語を題材に描かれている絵画の意匠は、図1とはかけ離れたものである。

<sup>1</sup> Mewārī GG については [三澤 2019] を参照されたい。

<sup>2</sup> セットについても [三澤 2019] を参照されたい。

<sup>3</sup> [Vatsyayan 1987: 31]

そこで本論文では、ヴァーツヤーンによって解釈されている Folio23 について、GG のテキストを精査し<sup>4</sup>、Folio の意匠を他の作例と比較しながら、より詳細に分析していく。

## 2. 『ギーター・ゴーヴィンダ』 1.23 について

まず初めに、この絵画がどのような内容に基づいて描かれたものなのか、GG1.23 を精査していきたい。

### 2.1. 『ギーター・ゴーヴィンダ』 1.23

GG1.23 は、GG 第一篇第二の歌に含まれる。第一の歌と第二の歌は、共にクリシュナ神を讃える内容となっている。

【Folio 上部のラージャスターニー語 試訳】

gītāgovinḍaropatā ||23|| abhinava || vale jayadeva kahe he || he bhagavāṃna rāja kisā ho ||  
abhinava je meghanesarathā suṃdara ho || maṃdarācalārā dharaṇahāra ho || vale lakṣmī rā  
muṣarū je caṃdramā tiṇī rā cakora ho || isā he deva he hare jayakarom ||

『ギーター・ゴーヴィンダ』の貝葉 23. abhinava (今湧き起こった)。それから、ジャヤデーヴァが語っています。おお、バガヴァーンよ、王はどのようなか。今湧き起こった雨雲〔のように〕美しい。マンダラ山を支えているところです。それから、ラクシュミーの顔の〔ような〕月があり、そこにチャコーラ鳥がいます。このような、おお、デーヴァよ、ハリよ、勝利あれ。

abhinavajaladharasundara dhṛtamandara e

śrīmukhacandracakora jaya jaya deva hare |GG1. 23|

今湧き起こった雨雲のように美しい者よ。マンダラ山を支えし者よ。

シュリー<sup>5</sup>の顔という月に〔歓喜する〕チャコーラ鳥よ。勝利あれ、勝利あれ、神よ、ハリよ<sup>6</sup>。

### 2.2. Kuṃbhā と Śaṃkaramiśra の註釈について

先に Kuṃbhā による註釈を精査する。

abhinaveti | atrālāpaḥ | he abhinavajaladharasundara | he dhṛtamandara | nigadavyākhyānam |

<sup>4</sup> テキストの精査にあたっては、Mewārī GG の画家が主に Kuṃbhā の註釈を参照していたとされることから [Vatsyayan 1987: 66]、ニルナヤ・サーガル版のテキストを用いる。

<sup>5</sup> シュリーはラクシュミーのことであり、GG ではラーダーとラクシュミーは同一視される。

<sup>6</sup> 「jaya jaya deva hare」は、第二の歌のリフレインとなっている。

iti padam | he śrīmukhacandrakora śrīmukhaṃ candra iva tatra cakora iva | tan  
mukhādharaśudhāpānakaratvāt | iti dhruvaḥ ||

〈今湧き起こった〉と。ここで呼びかける。おお、〈今湧き起こった〉〈雨雲のように〉〈美しい者よ〉。おお、〈マンダラ山を支えし者よ〉。詠唱であり、[そのような] パダ(詩の一部)である。おお、〈シュリーの顔という〉〈月に〉[歓喜する]〈チャコーラ鳥よ〉。〈シュリーの顔〉という〈月〉として、ここでは、チャコーラ鳥として[示される]。[チャコーラ鳥は]その顔、[すなわち]唇という甘露を飲むことから[言われる]。繰り返しの詩句(リフレイン)である。

Kumbhā は初めに「abhinavajaladharasundara dhrtamandara」を呼格として示している。また、月がシュリーの顔として説明される。チャコーラ鳥はヤマウズラ的一种で、月の光を飲んで身を養うとされることから<sup>7</sup>、ここでは月であるシュリーの顔(唇)という甘露をチャコーラ鳥が飲むと解釈されている。

次に、Śaṃkaramiśra による註釈を精査していきたい。

punaḥ kīdr̥ṣa | abhinaveti | abhinavo nūtano yo jaladharah sajalameghas tadvat sundarah |  
anenāpi bhavyatvam uktam | punaḥ kīdr̥ṣa | dhṛṭah kṣīrābdhimanthanāvasare mandaro  
girivīśeṣo manthānadaṇḍabhūto yena tādr̥ṣa | anena sāmartyamuktam |

それからどのようなか。〈今湧き起こった〉と。〈今湧き起こった〉[すなわち]新しいもの、それが〈水を含んだ〉もの、[すなわち]雨雲のように〈美しい者〉。これによってもまた、存在するものと言われる。それからどのようなか。〈支えし者〉は、乳海攪拌において、〈マンダラ山〉、[すなわち]特定の山の[姿をした]かき混ぜる棒があり、それによってそのように[する者である]。これによって、意味が通じた。

Śaṃkaramiśra は dhṛṭamandara (マンダラ山を支えし者) について、インドの神話に基づいて説明している。ここにおけるマンダラ山の神話は『バーガヴァタ・プラーナ』等に見られる。以下で、Mani による神話を引用したい<sup>8</sup>。

<sup>7</sup> [小倉 2000: 87]。また、『アマラコーシャ』の註釈では次のように言われる [Ramanathan 1971: 355]。

cakati tṛṣyati jyotsnayā cakora

月の光によって喉の渴きを癒すチャコーラ鳥よ。

鳥類学者によると、チャコーラ鳥は一日の内で様々な時間帯に鳴くが、最も一般的には、夕刻にかけて鳴くとされる [Hume 1879: 38]。インドの詩人たちは、この夕刻に響き渡る鳴き声が、月の光を求めて鳴いていると捉え、クリシュナとラクシュミーの関係性と重ね合わせて想像していたのかもしれない。

<sup>8</sup> [Mani 1989: 80-81]。Mani によると、『バーガヴァタ・プラーナ』8.7の他に、『アグニ・プラーナ』3や『ラーマーヤナ』Bālakāṇḍa 45 にも見られるとされる。また、神々とアスラの乳海攪拌の物語は『マハーバータ』1.15-16 においても語られているが [上村 2002: 143-148]、そこではヴィシュヌ神は亀の姿として登場していない。

聖者ドゥルヴァーサスが神々に花輪をプレゼントしたところ、インドラ神が自身の乗り物である象の牙にその花輪を掛けておいた。すると、その花輪の蜜を求めて蜂が来て、不快に思った象は花輪を壊してしまった。それを見て怒ったドゥルヴァーサスは神々に呪いをかけた。そこでヴィシュヌが乳海から不死の水アムリタを取り出して飲めば、呪いは回避できると助言した。そして神々はアスラたちに力を貸すよう頼んだ。神々とアスラたちはアムリタを取り出すために、掘削機としてマンダラ山を、攪拌網としてヴァースキという蛇を用いた。そのときヴィシュヌが亀に姿を変えて現れ<sup>9</sup>、マンダラ山の下にもぐり攪拌を支え、アムリタを手に入れた。

したがって、マンダラ山を支えし者は亀の姿をしたクリシュナ神を意味している。Śamkaramiśra は、さらに次のように説明している。

punaḥ kīdr̥ṣa | śriyo lakṣmyāḥ mukham eva candra āhlādakāritvāt tasya cakora | atra lakṣmīmu  
khaçandrādharasudhāparamotkaṇṭhatvena bhagavataś cakoratvanirūpaṇam | anenāpi  
ratikaūśalam evoktam | ‘pratyagro ’bhinavo navyo navīno nūtanō navah ’ ity amarah | anayā  
saptapadyā nāyakaguṇa uktaḥ | nāyakaguṇas tu ---‘tyāgī kulīnakuśalo ’tha rateṣu vijñāḥ  
khyātaḥ kavīte ca guṇī dhanādhyah | bhavyah .....śobhāvānsubhago ’bhīmānī strīṇām  
mataḥ śubhacā iha nāyakaḥ syāt’ iti ||

それからどのようなか。〈シュリー〉の、〔すなわち〕ラクシュミーのまさに〈顔〉が〈月〉であり、歓喜させる力による、その〈チャコーラ鳥よ〉。ここでは、ラクシュミーの〈顔〉という月の唇の甘露を強く望む〔者〕として、バガヴァット（クリシュナ）がチャコーラ鳥として描写される。またこれによって、まさに幸福な愛の歓喜と言われる。「pratyagro ’bhinavo navyo navīno nūtanō navah<sup>10</sup>」と『アマラコーシャ』で言われる。この7つのパダ（saptapadyā）によってナーヤカ（主人公）の性質が言われる。さて、ナーヤカは、「吉兆な生まれの主人公であり、それゆえ、愛の喜びにおいて賢人と知られ、そして詩の技術に精通し、美德に富んだ者である。……輝かしく吉兆な者、自尊心のある者、言葉の優しい者は、女性たちの望みに相応しく、ここにナーヤカがある」<sup>11</sup>と。

<sup>9</sup> GG1.6 では、亀の姿のクリシュナ神（Kūrma Avatāra）を次のように讃える。

kṣitir atvipulatāre tava tiṣṭhati pṛṣṭhe |  
dharāṇīdharāṇakīṇacakraḡariṣṭhe ||  
keśava dhṛtakacchaparūpa jaya jagadīśa hare |1.6|  
世界は汝のいと広き背に立つ。  
大地を支えるとても重い丸い傷跡に。  
ケーシャヴァよ、亀の姿をしたものよ、世界の主よ、ハリよ勝利あれ。

<sup>10</sup> [Ramanathan 1978: 107] すべて「新しい、若い」という意味。

<sup>11</sup> 出典不明。

Kumbhā の註釈と同様に、シュリーの顔（唇）という甘露をチャコーラ鳥が飲むと解釈している。さらに、チャコーラ鳥はクリシュナを意味しているとし、月で例えられたラクシュミーの唇の甘露を、クリシュナが飲む（口づけする）と解釈し、シュリーとクリシュナの関係性を明確に示している。

以上のように、GG1.23 はインドの神話をもとにしてクリシュナが讃えられている。

### 3. Folio に見られる意匠



図2 Folio 23

Mewārī GG は、物語の時間的な流れを表現するために、複数の場面で構成される。そのため、上の図2のように向かって左側から、三つの場面に分けて詳細に分析を行う<sup>12</sup>。

#### 3.1. 場面①について

場面①では、白い花輪で飾られた褥の中でクリシュナとラーダー<sup>13</sup>が会話をしているように向かい合い座っている。褥の周りにはバナナ等の複数の木々と奥から流れ出るヤムナー川によって場面が分けられている。また、彼らの足元に流れるヤムナー川には蓮の花が咲いている。

ヴァーツヤヤンは、シュリーをじっと見つめてうっとりしたハリが座っていると述べ、さらに、ぶら下がっている花輪が神聖な領域を示していると述べる。詩の中にはこの

<sup>12</sup> 本章でのヴァーツヤヤンの解釈は [Vatsyayan 1987: 31] を参照した。

<sup>13</sup> ここではクリシュナとラクシュミーとも考えられる。

場面は含まれていないが、ヴァーツヤーヤンが言うようにクリシュナとラーダーのいる褥が神聖な領域であることを示し、生い茂った木々に隠れるように褥が描かれていることで、GGにおける二人の遊戯を暗示させるようである。

### 3.2. 場面②について

絵画中央の場面②では、クリシュナを含めて七人の人物が描かれ、手前には四頭の牛が描かれている。ヴァーツヤーヤンはこの場面について「空全体を覆う雲が、地平線全体に広がり、雷と稲光がある」としており、雷と稲光は確認できないが、雨雲が空全体に広がって表現されていることが確認できる。

次にヴァーツヤーヤンは、「ハリが小指で山を支えながら直立し、ブラジュ地方に住む人々と畜牛を除いて、風変りな帽子<sup>14</sup>のようなものを被った二人の牛飼いがいる」と述べる。場面の中央に、四臂を持つクリシュナが山を右手の小指で支えながら横笛を吹き、左手には花のようなものを持って描かれている。クリシュナの周囲の人々は、合掌しながら彼の方を向いており、祈りを捧げているようである。帽子を被った二人の牛飼いは、牛飼いの棒を高く上げて、クリシュナとともに山を支えている。また牛たちも、川を覗き込む一頭を除き、三頭がクリシュナの方を向いている。クリシュナが支えている山の中央には白い祠が描かれ、山の四方八方からは、水が下に流れ落ちている様子が見られる。流れ落ちた水は、ヤムナー川へと続いている。

ヴァーツヤーヤンは、「増水するヤムナー川がハリの褥に続く線を作っている」とし、「〔画家は〕大洪水という発想を、乳海攪拌の万能薬（甘露）と重ね合わせて絵画的に解釈している」と述べていることから、この場面は、詩の「今湧き起こった雨雲のように美しい者よ。マンダラ山を支えし者よ」を表現していると考えられる。

さて、先に述べたように、乳海攪拌の物語は様々なインド神話に登場し、細密画の題材としても選ばれてきた。ここで、乳海攪拌を題材にした細密画がどのように描かれてきたのか確認しておきたい。

図3、図4は、British Museum に所蔵されている乳海攪拌を題材とした作品である。どちらの作品も、神々とアスラたちが攪拌機であるヴァースキをマンダラ山に巻き付けて、左右に引っ張り合いながら攪拌している様子で表現されている。さらにマンダラ山の下には、亀（Kūrma Avatāra）が山を支えている様子も描かれている。

また、GG1.23を題材に描いた作品の中で、図5のように表現された作品もある。図5は、Bhārat Kalā Bhavan に所蔵されている Būndī 派<sup>15</sup>によって描かれた作品である。この作

<sup>14</sup> おそらく雨除けの帽子であろう。

<sup>15</sup> Būndī 派は、ラージャスターン州の中で南東に位置する地域であり、16世紀の終わりごろに誕生した流派である。Chunar Ragamala と呼ばれる作品が最初の作品とされる [Ahluwalia 2008: 65]。図5は Būndī 派の初期の頃の作品と言われる [Vatsyayan 1981: 4]。

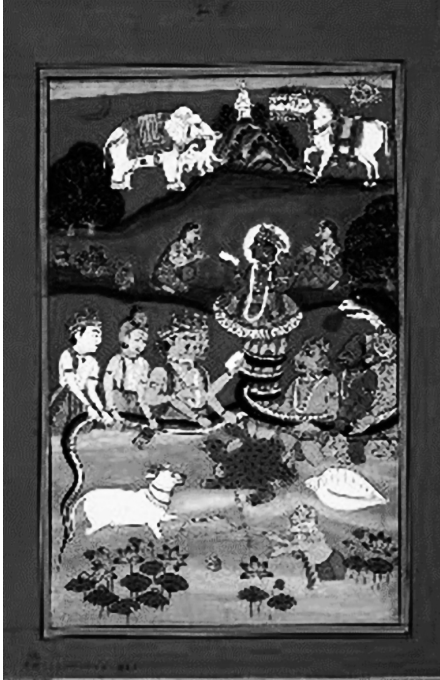


図3 Kūrma Avatāra  
1800年頃、Rājasthān 地方  
British Museum 所蔵  
Museum No. 1940, 0713, O. 36



図4 Kūrma Avatāra  
1790-1810年頃、Rājasthān 地方  
British Museum 所蔵  
Museum No. 1880, 0.2289



図5 Būndī 派による GG1.23  
[Vatsyayan 1981: 13] より引用

品はドローイング（線画）ではあるものの、中央に掘削機としてマンガラ山が置かれ、山の左右にいる神々とアスラたちが、攪拌機のヴァースキを引っ張り合っている様子が描かれており、図3、図4の作品と同様の意匠が用いられている。つまり、図5の作品を描いた画家は、「マンガラ山を支えし者よ」を乳海攪拌の物語を用いて表している。

このことから、GG1.23 を絵画として表現する場合、通常ならば、乳海攪拌の様子が描かれるのではないだろうか。

では、Mewārī GG の Folio23 はどのような意匠が根底にあるのか、以下で二枚の作例と比較して分析したい。

図6<sup>16</sup>、図7は、どちらもゴーヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナを描いた作品である。この絵の題材となっている神話は『バーガヴァタ・プラーナ』第10章で語られている。Mani を参考に神話の内容を確認したい<sup>17</sup>。

ゴークラに住む人々は、毎年、雨の神であるインドラ神に雨乞の儀礼を行っていた。クリシュナは、インドラ神ではなく牛を養ってくれるゴーヴァルダナ山に儀礼を行うよう、ゴークラの人々に言った。そのため、その年は、ゴーヴァルダナ山に儀礼を行うこととなった。このことにインドラ神は腹を立て、ゴークラに大雨を降らせて沈めようとした。しかし、クリシュナがゴーヴァルダナ山を小指で持ち上げて傘のようにして、ゴークラの人々をその下に避難させた。雨は7日間降り続いたが、人々はクリシュナの優しさのおかげで苦しむことがなかった。打ちのめされたインドラ神はクリシュナの讃歌を歌った。神々は彼を、牛を守る者という意味で「ゴーヴィンダ」と呼んだ。

図6を見ると、クリシュナが左手の小指でゴーヴァルダナ山を持ち上げている様子が確認できる。ゴーヴァルダナ山の下では人々が雨宿りをしており、女性たちの中には木の棒を上げて、山をクリシュナとともに支えている。空には雨雲が広がり、白い象<sup>18</sup>に乗ったインドラ神が描かれている。また、持ち上げられたゴーヴァルダナ山の四方八方からは、水が流れ落ちている<sup>19</sup>。

図7も図6と同様に、中央にいるクリシュナが小指でゴーヴァルダナ山を持ち上げてい

<sup>16</sup> 図6はBīkāner 派による作品である。Bīkāner 藩王国は、15世紀頃にMārwar 王国からの独立を宣言したBīkaji(Jodhpurをつくった、Rao Jodhaの息子)によってつくられた。Bīkānerの統治者たちは、画家にとって偉大なパトロンであり、宮廷のアトリエはラージプートのアトリエの中でも、最も大きなアトリエであったと言われる[Ahluwalia 2008: 96]。図6の詳細な分析については、[Goswamy 2014: 196-199]を参照されたい。

<sup>17</sup> [Mani 1989:423]

<sup>18</sup> airāvata と呼ばれる白い象で、4本の牙を持つとされる [菅沼 1987: 3]。

<sup>19</sup> 図6においては、牛飼いや牛飼いがクリシュナの方を向き、彼に夢中になっている様子や、下方に描かれている川辺で、牛飼いや牛飼いが乳搾りをしたり、牛が出産をしたりしている様子が描かれている。ゴークラの人々が安心して雨宿りをしている様子が表現されていると言える。





図6 ゴーヴァルダナ山を持  
ち上げるクリシュナ  
1690年  
Ustad Sahibdin、Bikaner 派  
British Museum 所蔵  
Museum No. 1960,0716,0.16

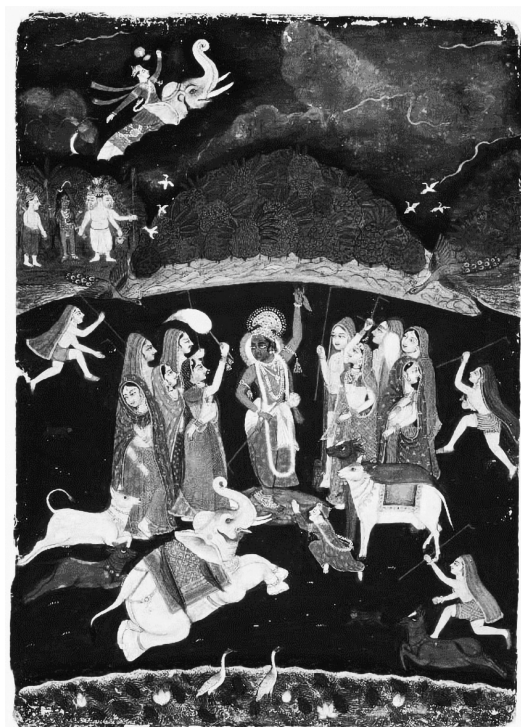


図7 ゴーヴァルダナ山を持ち上げる  
クリシュナ  
1750-1775年、おそらく Bundi 派、  
Philadelphia Museum of Art 所蔵、  
Museum No. 1985-82-1

る。牛飼いと女性たちと動物が、大雨から逃れようとゴーヴァルダナ山の下に避難しており、人々は牛飼いの棒で、クリシュナとともにゴーヴァルダナ山を支えている。空全体には雨雲が広がっており、稲妻が走っている。また、白象に乗ったインドラ神が描かれている。

このように、Mewārī GG の Folio23 と比較すると、ゴーヴァルダナ山を持ち上げるクリ

シュナの描写と類似した意匠であることが分かる。特に図6で描かれる、山の四方八方から流れ出る水の描写は同一の表現である。

したがって、Mewārī GGの画家は「今湧き起こった雨雲のように美しい者よ。マンダラ山を支えし者よ。」を乳海攪拌の物語で表現するのではなく、それらを一つの場面に収めるために、ゴーヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナの様子で表現しようとしたのである。ヴァーツヤーヤンの言う、大洪水と乳海攪拌の甘露とを重ね合わせて描いているかは明らかではないが、少なくとも Folio23 に描かれる山は、マンダラ山として描かれていると考えられる<sup>20</sup>。

### 3.3. 場面③について

山のように仕切られた場所で、一對のチャコーラ鳥と二人の人物が描かれる。チャコーラ鳥は、光り輝く月に向かってくちばしを向けて座っている。この鳥と月は、「シュリーの顔という月に〔歓喜する〕チャコーラ鳥よ」を絵画として表現したものである<sup>21</sup>。

また、二人の人物のうち、向かって左側では、クリシュナがドーティーと折り重なるスカートを着て男性の方を向いて立っている。ヴァーツヤーヤンは、向かって右側の男性をGGの著者であるジャヤデーヴァであるとし、「彼（クリシュナ）に祈りながら合掌して立っている」<sup>22</sup>と述べる。また彼らの足元には、「rāmajī rāmajī」と書かれた紙と、水瓶が置かれており、クリシュナを讃えている様子が窺える。この描写は、詩のリフレインである「jaya jaya deva hare」を表している。GGには詩の中にリフレインが多用されており、Mewārī GGでもそのリフレインは表現される。図8は、GG1.22<sup>23</sup>を描いた作品であるが、この作品の右上には、場面③のようにクリシュナに敬礼しているジャヤデーヴァが見られる。

<sup>20</sup> GG1.23を題材にしたアッサム派による細密画においても、ゴーヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナの意匠が採用されている。この作例については別稿にて扱いたい。

<sup>21</sup> ヴァーツヤーヤンは、「8世紀初め頃のブーンディーの〔絵画〕のセットでは、月には顔が描かれ、同様の意匠を通してはいるが、candra-cakora〔のフレーズ〕は異なって解釈されていた」[Vatsyayan 1987: 31]と述べる。残念ながら筆者は、現段階ではその絵画を見ることができていない。

<sup>22</sup> [Vatsyayan 1987: 31]

<sup>23</sup> janakasutākṛṭabhūṣaṇa jita-dūṣaṇa e |

samaraśamitadaśakanṭha jaya jaya deva hare [GG1.22]

ジャナカの娘（シーター）のために装身具を身につける者よ、ドゥーシャナを打ち破りし者よ。

十の首を持つ者（ラーヴァナ）と戦って殺す者よ。勝利あれ、勝利あれ、神よ、ハリよ。

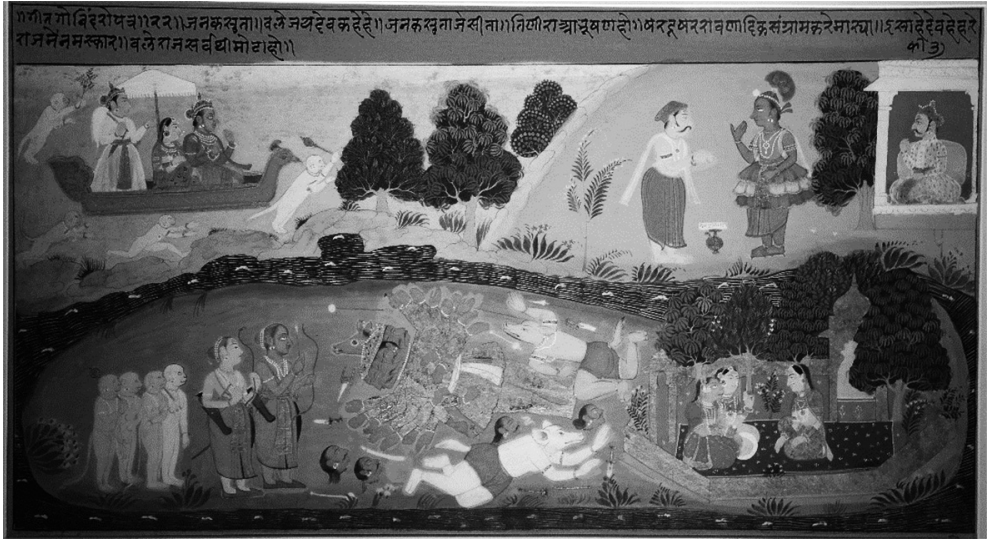


図8 Mewārī GG Folio22 (Āhād Museum Udaipur 2016年9月筆者撮影)

#### 4. おわりに

以上、Folio23を三つの場面に分けて詳細に分析した。詩節においては、マンダラ山が登場するが、マンダラ山を絵画で表す場合に、一般的に用いられる乳海攪拌の光景では描かれていないことが分かり、ゴーヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナの意匠が用いられていることが明らかとなった。このFolioに描かれる山は、マンダラ山として描かれた可能性が高く、他には類を見ない作品と言える。今後は、ゴーヴァルダナ山信仰と細密画との関係性を明らかにしていきたい。

#### 【参考文献】

- Ahluwalia, Roda, 2008, *Rajput Painting: Romantic, Divine and Courty Art from India*, Ahmedabad, Mapin Publishing.
- Goswamy, Brijinder Nath, 2014, *The Spirit of Indian Painting: Close Encounters with 101 Great Works 1100 – 1900*, India: Allen Lane.
- Hume, Allan Octavian, Charles H.T. Marshall, 1879, *The Game Birds of India, Burmah, and Ceylon. Calcutta Vol. II*, Calcutta, A.O. Hume and Marshall.
- Mani, Vettam, 1989, *Purāṇic encyclopaedia: a comprehensive work with special reference to the epic and Purāṇic literature*, Delhi: Motilal Banarsidass, (reprint).
- Ramanathan, A. A., 1971 *Amarakośa I: With the Unpublished South Indian Commentaries*, Madras: The Adtar Library and Research Centre.
- , 1978, *Amarakośa II: With the Unpublished South Indian Commentaries*, Madras: The Adtar Library and Research Centre.
- , 1983, *Amarakośa III: With the Unpublished South Indian Commentaries*, Madras: The Adtar Library and Research Centre.

Telang, Manghesh Rāmakrishna and Wāsudev Laxman Śāstri Panśīkar, 1913, *The Gīta-Govina of Jayadeva with the commentaries Rasika-priyā of King Kumbha and Rasamañjarī of Mahāmahopādhyāya Shaṅkara Mishra*, Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, Fourth Edition.

———, 1923, *The Gīta-Govina of Jayadeva with the commentaries Rasika-priyā of King Kumbha and Rasamañjarī of Mahāmahopādhyāya Shaṅkara Mishra*, Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, Sixth Edition.

Vatsyayan, Kapila, 1981, *The Bundi Gīta-Govinda*, Varanasi: Bharata Kala Bhavan, Banaras Hindu University.

———, Maheswar, Neog, 1986, *Gīta-Govinda in the Assam School of Painting*, Assam: Publication Board.

———, 1987, *Mewari Gīta-Govinda*, New Delhi: National Museum.

小倉泰、横地優子、2000、『ヒンドゥー教の聖典二編—ギータ・ゴヴィンダ、デーヴィー・マーハートミヤ—(東洋文庫 677)』、平凡社。

上村勝彦訳、2002、『マハーバーラタ 1』、筑摩書房。

菅沼晃編、1987、『インド神話伝説辞典』、東京堂出版。

三澤博枝、2019、『インド細密画におけるラサ理論の研究—メーワール派細密画『ギータ・ゴヴィンダ』における別離の恋のラサを中心に—』、2019年度東洋大学審査学位論文。

キーワード：インド、ヒンドゥー教美術、『ギータ・ゴヴィンダ』、細密画、  
メーワール派